新評戲曲十種

忠臣講釋　第八回　宅兵衛上使之段

小永井小舟先生戲評

此回主意平右衛門情願、不過欲列諸士義盟之尾耳。顧一厮養由良鎖鑰深嚴。不輕易許。故一面使內人舁下哀訴乞之。至欲把愛兒性命換世子。一面自己打扮怨家的使臣。且窺由良心裡。且欲干之。作者費多少心思、搆成一篇佳文。首段由良韜晦形迹。假裝貪鄙營利一般人。看阿北做乞求

一般人訛諧調弄使不得開口。寫得齒牙伶俐。優諢不啻。忽入鎌倉使人在門。寫他驕傲侮罵之狀。由良恭慎從容之態。又忽轉出阿北說本來情願。并由良調戲淫姤模樣。更自一刀觸足。局面變換入悲慟哀切之段。忽然復有由良出來。末段一轉自闕破平右至一著答問處尤是通篇精神所注。結構絕奇。學文者須子細看之。

通篇絕奇處在出一著問答表由良隻眼已偵破他了。然從首段曲々換面。折々出奇。使人思想不

本篇上半字眼、在一藏字劈頭噴出財才同音相呼、折旋入由良介去處、

由良忠肝義膽錬来貞固堅實、偶借府庫基礎而表出之、

得収合到此。不獨從前說話始有分曉。作者以十分構思。出十分筆力。使末尾大掉。句々靈妙全面皆動。

蔵の内ハ敗ハ朽ルあるを。朽ルあるを身ハ内の輕筆轉過木ハ在所ふ引籠ふ由良之助ハ身の置所由良暗形迹下面。說話伏於此考ふ分ふ山科ハ安閑樣ハぬ系侯暮ハ只、儉やく茂弟一ハ石と根継の茲普請自身手傳ふ壁塗の左官ごとく拵付る土ふよごも仁躰ふ始末即上儉字好ふけふ物好也、折うら戻る

以下摸寫十分纖嗇的小人以見由良韜晦之術筆々巧緻

治家勤儉之法說來細密

一ッ子力弥、父が前ゝ手をはゝ〳〵、日の暮る迄精出され、唯お草臥、取早お休なさいませ、ゝ、息子爲お帰りなされ〳〵、ア、氣持の利ぬ事でハ事ハい。日暮前ゝ仕ゝハちつと宋りとゝり過しく置ゝの時日の為。今時ゝハ休むと。今日の仕ゝハ仕ゝ切。ゝふ一坪仕殘なと。せんゝりにそ紙が延く来ゝ宋と一日の手間がちゝふ。そこら傍ゝ氣が付ぬと。物ゝふ費が多い。」イヤかういゝふ物の、左衣爲ゝふゝ是切時日ハ又とうから精出してもらひ

まちよ、然らば左様ふ殺しませふ、足代とんを飛おまれぢ、コレ腹の減た上を、兵揚ふ花ど、一チでいへ。くかいは様はぬぶ大喰が惨るい。（諧謔一咲）ふつても啓い且形爲、そんなら的ロ〳〵こつち飯ふいたしまちよういいかふまそつち飯もようらふが顧ふくが作料をそつち低料ふて貰ひふい。（諧謔一咲）〳〵見ハ〳〵らぬ、〳〵らぬるといふよう、壁下地程をいい腹へ、白壁を塗ひりて、いんでこまて、左官ハ孫手へ由良之助、力弥も俱ふ落ち

本題構思入手左此

る芭具取り左付る八日新其光をあぶ御主人の
轉過妙 左好さへ足軽ゆりふい。身分浅浪くゆ今い
足分身のかさき、突如来皆伏下面 ち器ず右衛門ず女房お
きた、系子ゆ手紙引おぞくと、切戸系いて庭ゆ内、
顔ひるげふゝをけうく、ゆふゝけまゞ由良之助
掛でゆざりますす、繪ふおゆ見へ殺したるいば
ざりませ祢ど、お閑及びもざりませう、私ち鍾
倉のお屋敷浅勢ておりまし、足軽ち器平右衛
と申者の女房粹ぐじば当ち炊ぐてふおんい

思ひふかく疑ふ足軽平右衛門、そつと前方北國へお発御ふいうれく、足軽の手右衛殿へ、右様でばざりまち、其又お内義やお供衆ゞ何の用で来ふが定へ。一間へ参じましたいお形の筋、夫ずお衛門参らまして、伝訴はう〳〵苦でいばざれば、去く此病氣それ故女房の私が名代のお願ひと半分所ぢ。（傍客的心腸如画出讀来絶倒）へ、かれくそふそ名部さ。ねとくの大ユゞ。ば、か弥十露盤と取寄て、おやに様へ。ねたあゞ二人。大ユが一人。式低料が

将家中瑣々小計一々打算絲毫不敢放過唯是看阿北做一乞求之

人欲以此塞其口裝作尋常守錢奴情態如戀家忘國之人使人不聞吾門牆由良胸中鎖鑰深嚴重密

ふつう飯でこめぐ。これぐこめ人ぐこめがたくさんよ。
ないらこめ人ぐこめ一日ふ位ぐ喰ふぐ。二升ぐ喰ふ
ぐい。毛ぐ代ぐ十銭の米ぐて。二升代ぐ二ぐ
銭ぐ。又汁ぐ禁味噌の代ぐ十銭ぐ。さいぐ代ぐ
のめぐぐを五切ぐ。一切ぐ一文ぐ。こ
ぐも三人ぐこめ。三ぐ一文ぐ。四文ぐ。
ぐ。毛ぐ。又ぐ。拙又禁物ぐ香物ぐ塩茶荒
積ぐ。一日ぐ廿六七文ぐ。廿七
文ぐ。上ぐ味噌の代ぐ十銭ぐ。ぐぐが五

人欲以此塞其口裝作尋常守錢奴情態如戀家忘國之人使人不聞吾門牆由良胸中鎖鑰深嚴重密

一路變寫貧婪的情態皆是裝作營家利忘國

文。ハて四十七文。毛戔十五文の相場にして銀五匁ぢ。五七世五。一ン七が七。四五世。一ッ四が四と。銀目ふ〳〵七分一厘。爰へ一分六分の米代と。九分九代料合おて見まバ。ア、教合十一分三分一リと。設ふるなに今ハ米毛程の物へ。お取四ッ中へ心きゐいるれ〴〵、申さ孫ぞ叶ハぬるぞふぞお吹ふされく、掛阿北一語コリヤ力弥、そちふ云付ケさ下京の更進一層ふ質の相談孫松ぞ〳〵ゐりしう、更復打攪阿北說イヤ平瓦如曾不觸耳朶

ュ付て今ハ分、あれ方へ奈り段くお談仕りま

譬

たゞ表口三間ずゞ裏行廿間の家屋敷銀高へ六貫目歩銀三分と申しましたあれ亦ら申ます
へ。家賃の歩銀ハ一貫目に高かゞ七分ら八分の物。夫に一貫目の銀を。一ヶ月に卅匁ばゞの利を出しく。ぶ賃に入ゞく銀借ろ者ハ。まア京中にあるまいと。絶倒

仲がいゝ。おいまゞ知りませぬ。何ぞや月に三十匁の歩をきがいといふ。なア。こふもないがなア。上國人語氣自不激烈寫罵聲方音佳絶

一貫目の銀を銭にすれば。あら積りしても六十二貫。是を日銭四しにおく。一貫かしくゞ一日に

豺狼之欲貪婪無厭看如可惡又更失笑噴飯、用論賛語畧一頓妙、

元利共に十五文づゝ出来て。百かゞ附て元切ば。一貫の銭が百かゝるとて一貫五百六十に成。是銭六十二貫借て見まゝ。かふつ。二六十二。六に卅六。二五十。五六に十。二十四貫七百廿と成。是を銀にかへれば。五百四十匁五分百かにかれ程の歩おやふよつて。一ケ月に割ば。凡一貫目ふるハ十分程。それを家賃なをやらそ。二十匁ふてくかそふといふを。高いと云ふ根から算用をらぬと云ふ物也。高利貪る十露盤に武士の業俗ハ埃む

漸入本境

阿北口欲開早已遣由良攪擾今又撞著權官使臣在門竟不能開口多少悵恨多少憂悶然使臣不別人乃是良人同一欲闕由良一為哀訴乞求一般人一假裝挾權市恩的一般人平

なく。十分貧吝十分打裝阿北呆了情景可見、彦ふい恥て居く為き。ゆゑ、
ゑ、ゑゑを制をゆよ。ゆゑ詞もなゆ扨、小收起下段
召使あハたゞしく、鍋倉ゆゑ居上使として、鍋
閉宅を悔抜とやらに出之と、ゆゑ力弥ゲ立上り、
女中閉ゆゑ通りお客人きき万事い後程先く
勝手へ立よよ。いゆゑ代物ゆきおくと。然らば、
敬ト居休ゆ。見角宜トうゆ概然と我ゆゆ代
引立て行。ハテ心得ぬ鍋倉の上使、ふとらば加
うくと耳ゆ口、用意せよと力弥代立ゆ、這箇經營為下面地衣

右手段良苦處、自見作者手段亦良苦、

紋縮ひ、待間程ふく押開く切戸口、間中写せバ
と肩磬張のはだり来る餝閑宅を撒に成ハ礼
義のおれそまも、新であらひ、上座を座せバ寫驕奸挾
羅狀、由良之助慇懃よ、先ッ此方へ上使、此苦芳
刀拵と手代はけバ、畏邑ハ、ヤ千里、美里を主命かなれば。
騎人
是迄なかきぶ。使者は苦芳を思ひかつて。格脱の
挨拶ぶかなバ満足ふれど。そこら遍へ氣のつかぬ
やつがばかさ。承ッ社ぞ由良之助厳ましい主人
師直公へ、なぶ去くいと申、又お出入が去た

汝君臣貪濁固知非行
実刑行何至卒々
侵入是畢竟平古打拵
權奸故心底淺露亡角
盡見、

罵辱極口使人難堪、然此等人本是謀慮淺近、故由良優得籠絡

使臣急問由良緩對、

いとゆら、先達て京表おだざる茶師寺殿が申越をしがいつぞや腹切てくたばつた塩冶判官が国共ふ滅亡したと主人がおもふかんどいいふて。付弥ふかそもん由。早竟由良殿おなれ家老職いふしてゐ謀ゝからぞ。代官否我れ主人の云付弥を義ふ相違おさや。返答いふ承はらんと。腕強うあし。上使の袴掴くちた然ら上使の一通先達て茶師ち語へ申さ通おなれ短慮故、我く迄が殘浪人代拵ふ引籠て居生べ友

傍輩が折角参り、款を討ず亡君へ偽申上げ、師直の座敷へ押参ふのと。何ぞ命ふ掛がくを、あれ掛ふ。そまつくとんと返答ふいまする入。（世表小人佞諛之言最妙）茶師寺掛へ有れお嘲、系ホ侍残お出ゆ、くれたくとへそばげきべ、ぞ利徳をれ渡世致したい、又師直掛京都のお買物、何ぞまらば我等よ仕下、さらば、値分下直ホ買旦ーく掛上ん、さすれぞちまエおかへりも同然なれば、款討性根の系いるかのつうら世間へも知ホ、主人師直エの耳へもいらば、宅兵

與首段呼應

所說實而不華使他自易放心況由良渾跡營利之人他曾所見聞熟

衛一詰心と赦し用心の繩ぞりもゆるゞせにさそふ
と云ふ孫ぞろふが云ふ、乞はまたきつい臣疑念由良
復對代由良を助欲討ふ存ござらば。左樣よ丸もう
さふ、孫を殺もまゞ。ようがく侍ふ人ゞ果業
所ぞ殺いお咄しの次ぶちよ必おうはさかしさ斗。
遮てまゝ云かお出へを望ぬ某。分ぶの上使ふ預ら
ふとう。夢ゆつく存ぎぬる。兎角上使ぶお祝宴
宜しう形なると、聞て孫のちゞり撥宅兵衛詰罵スリヤ伺
と云ふく欲討ふ存ハないう。其答く欲討といふ

追叙判官自盡之状、又借宅兵衛口出之、畢竟宅兵衛是如何人、平右打扮的奸黨、故極寫其悲壯激楚之情、以振觸由良末語為鬼報怨之語、為臣子者聞之、如何能恬然哉、而由良曾不省如越人視秦人肥瘠

扨武士のそぼ業金銀財貯田畠を買求義ふぞと根強ふ建る便ぬけ叶いぬるさ、平右ふ腰ぬけとふ不ふ持ふ立て腰ぬ抜本を悼らぞそうらいしをひ扨くつくおらぞ主人ふ歎しふとて、片腹痛いやんさく。平罵が忽當づて痛い腹罵辱愈痛激ヤ、まだしも切腹ハ味やくれくげふ、其ゆい去くつ年三月十五日拾仗を引受塩冶ふ皮麻上下のふ石くと家敷所ふ押直り上使拾仗へふまそもも時刻や過んと肩衣刎通三方取て押いくだ

此是由良心鎖深藏密閉憂平右欲闕竟不可闕

目做腰脱士人於宅兵衛君臣已放心了可知矣其未遽許者宅兵衛別有所不厭足也

紀、九寸五分代逆手小形コレ弓ゑへ。ぶで。ゆつき立て右ゑへ。そういと引回し、息も苦しくせぐりげふ。返をぐそ師を付そらぢ口。惜さ、骨徳ふ通つて。忘ら社ぞ、楠判官湊川まく人ち家期の一条ふ。よつと、生を引と云しでく、生きうつを死うそう、恨と時さでおらふうゆ吏ぐ。が狂ひ死仕ると色でも詠詠爺いぶいか。口おいうも年念ふも思いぬか。エ、張合のかゝ腰ぬかだ仕ふもせよ和女ら家来、沙汰ゑへ、なゑ出へどひも寄ぬうふいぬるゑと、

ふべなる堅地の煙草盆あり引寄せ一服
頓駐
ふたいまだとそしらぬ風情（從容委蛇寫雅量）
の内退屈、誰か茶持てこいわく咳嗽ふそつと力弥
が持出る、濃と薄いの井戸茶碗上使の傍まさし
置て、ぜん身い次へ立て行、ぶ袖法ふ粹がる茶、ぶ
くと一ッぷくお喜びと、濃茶の接拔、ぶくと頬い
やでぶざる、拙者茶い嫌ひゆえ、そつちへやれ
と突やる茶碗、相手ふはぼれる一歩の山吹、物
ものがたりそつと言上、結構なお茶ぐござは、由

罵者畢竟是假受罵者畢竟亦是假但讀者未辨其真假徒使激忿焦熬不堪

他惡漢意不在綠色茶固知之故啗之以黃色茶試看他反覆之間忽作夜叉忽作菩薩小人鄙態寫來如見

良之助殿の内、子息はお多賀、いやどふたかう共、抽去元、其茶が好ておざる、乍好我知ッてはる地色、内裏的、拙く結構なお茶、銘ハ何と申、大方鴈金う、宇治の名物ぶんの色が山吹と申のう、いやもぞんど素茶でおざれば、お好ならば何ぞく好りと、ア、色と何ぶくをかへいやもう。挿諸語一咲是いく赤いが多分に色む山吹の鴈金かい鷲は凡、掴頬する弩位、何、何挿評語由良之助殿。閃出主人師直京表の用る茶搗内苦労なぞら只今よ玉貴公お世話下されぬ

黄色茶方能醫惡漢猖狂之疾、

忽如入由良術中

か。是ハ〳〵永い、ずいぶんで望む案、早速望叶ふといふを偏ひとへに上使の御了簡行の〳〵拙者為に成りたい貴公の御恩我為難しいよ〳〵美変肝ふとかいくハ、京都の用事行う貴公とくとゝ合せとの云付おりゝ元ハ判官ハ家来なまぢ。是をとやかく功をおたてかされ。ぞ功さへ立ッ時ならば貴公の望む叶ふといふ物。ナニ、深心が糸つゝいうい。後段伏脉　丸ふりふく

を襟ハ肩衣角引立ッる、餅肖麩ハ、ぬけめなきはて了簡、去ぬかりはし嘗つく尚惑い、由良念一念「ぞ功ハ立揚

前難已方排遣後難又来如不易排遣

這箇手段追蹈前套如重複可厭然前已有茶矣不可無糕已有糕矣亦不可無投他所好他所好刺々在貨賂故刺酬以貨賂

ふいといふのゝ討つたやき宅兵衛責一責判官が後ろ
うたよ一ッ子為若は邉ふ後ゝも住ゝ由氏女人が首身
ゝが目面て討つたやれいやといへど古主の恩
を忘きぬ汝生置てい師丞公の後日は怨返を次
ゝ此場ハ立きぬくどうゝやと詰ゝ問ゝ尖き中
は間ゝ略一頓うゝ言蒔絵は厚蓋物有如行盡忽又開豁之景目ハ分
ふ持出る力弥を見るゝ居住ゝ居もぐりゝ星とか
いるかりくり的蕨抹茶菓子でゝざれどゝ慰ふ
ゝ上ゝ上ゝきくゝされうふら永ふなゝどゝそ後段伏脉何

就貧兒口中、平右暗自訴前禍所以起實在此、非徒說貧兒之貧、

お茶菓子とも彼山吹菓子とうなどくれんふお茶ま
だいれ銭多くいで行と殺ふ、拙左衛門下戸で
ごぢまづ、菓子ぞ大好物ぞーぶぞる、行からう行ますで
お心の付ふ。由良殿は揚ふ茶が一人。塩冶殿は
付て鎌倉にはいらば。判官を切腹ないは夜ばぬ物。ま
前ぶ主人も拙ぶと同じ。で。大茶好なる菓子好
ぶ。ぞ好ぶ拙を一ッぶくを感かんだゆく氏茶行ぞ、
まぶ速ふ。なちまま、こりゃぞ衣のちる恩ぶ、義ぶ
る似て内器用ぞぶ。何でござらふかい。今は中ふ

後面一局收結發端于此

夜半鐘下面一段針線

毎々用評語收束如史論賛

に申ふ物の平竟うはよ戦討つおつたにも及ぶまいいい。うつ叫され。おなの一ッお為若斗お討ふされ。夫も武ふよ否ぬ去と今夜かされまい。狗出の。鐘が鳴時まで。拙者ハ奥ぶ。付くまぜふ。平間ふ。だつふ。一ト討。我ホ多平中ハ子息が居ぶ多、行ぶいもくまち独走よ頼らん、夫ハ指ふ今ヤ渡した面り、夜半が鐘とぶんとはく。必ふ為ふ首ぶち切て。渡ぜ。きつと申付たで、力弥為、丹楽内、由良之助厨、後刻くと一人りて否四歌ハ井戸茶碗、菓子が器

全文前後過脉

阿北心頭說話口頭熬不往光景如画出

とあれそふ。銀次来でいるの首。祢ぢう称まどお大忠臣。詢然々々いろ〳〵なる〳〵奥ふ入、始終のおそ口先でいふくおられぬ為彩代。咲にさそぐ由京の戸代。あはぢは一間そはと昭、おつくゆるは前代女房、逐ぢなたふ手伐はう〳〵、不乞求一般人何ゆ〳〵加やらお多い時中〳〵、又中上中矣もお氣代毒掘ふぐら、家前も中まそ面丈まお懸門出くれ病者故、憚を願ぢ足徒風情の女房ふぐ、押付てのぢ願ひ、は吟なはまそひさらばまる籠ふなまそと、男ひへまふ

由良視他浅々至此方纔毀洩

照前復把鄙吝的説話假装来不識視阿北做何如女子

毛風情が合点参らぬい、ついに逢ふもない平右衛門、毛お内義、毛ばくと此山科と聚由良々助ふ願ひとそ、ヱ、ゆ〳〵た。夫れ病気とおい。人参代ふでといふ合力の形ひふ。イヤモ多合しさ〳〵致そふ的ら、用立てもおんぜさ〳〵扨ど、今でい参ふ逼迫れ身のこ。ふい借ふ銀ハ戻らぬ。利銀ハおこさぞ。此間と天河屋れ参平ぶふ伐蓋ふに黄ふ〳〵おいふれど、啖をふが太義ふ故。是も堺へ戻を程れ無代イヤモウ中〳〵如在ふい。なぜ移ど。ないがまりやうふいふよ

亡國之臣流離顛頓平右斷養幸加以病困看做乞求人誰謂不然願這大膽女丈夫喧破好生大快事由良心中暗々十分愛憐

由良固既打裝貧鄙營利的人何遽聽一女子之言而許之但彼所持正理拒之無辭敢不得不以試識出之

もあせうが又いづき成とお教をと接拶そこく立上れば、くだお待おされくだはりませ。さもしい家をふ殺せ。左程おお願ひふ案ふ殺ふ私た。でもだぞりふせぬ。夫があなたへお願ひ鎌倉の。ほ。供。欲。討。れ。ち。人。數。ゐ。たこれくいふ女ふ。や。忠。大。そ。れ。ふ。ふ。いふ。人。說未完忽又出打攪一番　出。欲。討。ふ。ふ。果。た。者。ふ。ふ。ふ。物。紙。合。点。な。ち。ま。欲。討。といふ。物。ハ。ぬ。ハ。く。命。を。接。祢。べ。ぬ。ふ。今。れ。世。界。ふ。系。命。を。接。な。主。ハ。欲。紙。討。ふ。といふ。たふげ。者。ふ。ふ。ま。いく。い。と。ふ

牽強作證絶妙

い〳〵一轉更妙我ホカ兵妹ハ訪ても忍招ヵ必ず応付だが
イヤ再思翻く来更妙ぞふぞ欲を討て死ぬ招のカ別ハ〳〵ま〳〵
かと去学文右に尋ふれば唐土代音の豫讓といふ者欲代衣裳切て主代仇をふく者こと有何で
そ色ゴよい手ぞと夫ゥらゴを〳〵見と〳〵衡と師
亜が定紋代付ふ者拙ホふ〳〵と。兵侯主代欲ゴ。
知と。ゴ。く。に。切ち。ご。ま。ぞ。欲。討の性面さ。つ。
ゴ。ゴ。と。ふ。物。句語倒底不離牙籌上装得妙ふでホ唐の者代
ゴ。ふ。ハ形ふ。手ゴ百ふ者ホ者の助でふ〳〵兵

通り。まして紙米穀等に足軽段。此主は大名。其
身は御主が氣まゝくら紙等。一語穿（挿絶倒）おとしてよと
手は八分。そやも互物風に傘（からかさ）を差に探す拙。云ば
いても埒（らち）明ぬ事ようしに附ぬとおふたる
らねば新を求め寄。是は肉親の助相談ませぬ
お詞。更切（更緊）に五百石がなかなかきても。僅（わづか）の切米と
哉（いとびさ）ましたた丈でも。今日女房子供難（やすま）ぬ悌しいに不るは
一ッ。大恩（おん）有御主人探。師直殿より一ッくと生害（しやうがい）か
憤り（いきどほり）無念を。晴さん老此あるに探。。。もや。かく。

刺骨語只聽得如醉生夢死人

ふ。されていざ。はまく。付かれ身でもあらば、お
咲出しふそ飲ゝらふゞ、何我いふても是程風情
お願ひ。も。情詞にも、是程叶はぬ大恋ひ、此侭
死るい厭様ど、情主人様は情用ゝも立ぎ、やらく
と大死をは心は内の口惜さ、激壮程量して此お形
ひ、由良は助様へ申てくれと、現生ゝ女房ゝを
を合しての吏は頼。病ハ業が恥ゝて、お疲かござ
ゝまゝせうゞ。激宕一驚歌詠の情供ハ生て居らぬ死出は
旅。吏、知ゝ情ふそ女房の身で此お形ひゝ業ゝ恥ゝ。

乃如曽不察何
由良語言總出於調笑
嘻戯心腸總亦出於貪
鄙營利装来終始一様
皆自起首藏字出而文
追段卸脱漸入漸深
瑣猥一番出阿北意外
作惟好咲

悼ながらも陰に控へて聞給へ。夫が望が叶べき
はさそくおふりあはせ。コレまた倶てお頼ひ申ますやい
のと、（這平吉已認在由良眼中）親子夫婦を互に付添と俊は願ひ申
る。アヽコレく此様な家を仕なおし。新いとこが油ぶらけれ
成ルはいの。エヽ始末をとうしぬも内証。コレ始末なされませ。
始末せて小銭が延るかと。（宕一折有姿態）さつても命が大切
おかさ。欲深ふなぞやいふ気か外に出来ぬ物だ
や。。。。そしてマア見るもの。。。ぶ見しい。。面。。。像（進歩来漸入佳境）そも
じれ様な見しい女房を捨死ふといふも子第一ぞ

ふ心中。手摘ふ水くさい男ふ一生連添ふよかと。何と思百。系ホ今でハやもめ此身分ナニト心ヨ恐ふく
くまい氣ハかいな。コレどふぢやくと、言葉。て。與前阿北
進膝反襯 ひつたり湧る係面面金たま女房が手とち
ぢ見てで居ふしが一頻くなふ搭としたふが。
いふおなぶりをバ迷ふくしら風情我おおふ
ふ。手洞狂でもなちふかち座興ふに寄。俺座
興でふい大変実。女房いふふげれど國ふ置去。今
でいホふ外ヶ此麻洞此上ホふ逢仕ふくまふ

歛襟正容之語、反是口角香艶、

倒底貪鄙人之心腸裝得以是始以是終

一箇眞心激發便見那忠貞烈女子金石一般一箇奸情裝作便見那不共戴天之心掃地兩箇如氷炭不相入一般然彼眞此假畢竟丈夫報國之心事家鄭重嚴密乃輙向曾無一面人

おもない仕合。それゆゑさくらは心おやくだ。今から愛れた肉親様。御恩もわすれ両親も有。それまじが何とさへいやそのおもいわれ。何とく惜ふへまっすいがくおおぶれかゝまぞ。猥褻一番乃作番内一様調戯態失笑れて突退い。やぞ。お。だ。り。お。ふ。お偏しても盗泉の水を呑ぞ。どれ程榮花ふくらもた大恩有る主人を忘果るお情。エ、そういふ心から茶てゝ須愛ぬるが悔しいもいい。口惜いといひ。かくいふ所ふもみれば猩家の様、サア平右こいと立上れぞ。アヽ何ぞいのふとた

忽傾呈他日如何能了大事是等總皆為下面分解地

夜半字主眼應前伏後

挿論一頓此處尤妙使人知從前由良心事皆出假裝也

ふても、入口ふハ音からぴんと結おろ、鍵を我
ものゞ所持なぞ、そつくりハいかれぬ。コヽ此孫
ふ後立ぞと。又ぶぶもちぶぶよ。ア、今恐いまだ
背色ふい孫る時ぶから恐ぶかけふと。大有意語讀者勿輕々看
過自然と洩し、恐ろ、ぞ、おかゝなぶ気ふ
恐物。吏を赤ホい奥の間よ、孫而さして孫を待ふ、
色よい。西ふを夜よを待て居ぶぞやらふ月此清
知色濁る池水よ。ふを彦そこ。奥源を、襖押のいに
計ふ。話又送つく女房ぶ、出ふも出られぬ籠の鳥途

已為那厮賣弄恨怒滿腔

才ふくれてゐたなどしぶとい、よるとさわいそふいふ心さそふとそ思いなんぞふ、見さげ果てといそふ、ふう、ふう、遅拙い判官様、あれ様ふ家来様お物越ばし、喧やそ家のうどんからもふぢいなしを腰ぬけ共ども、おいとやと暫し涙ぐまれ、ぐいぐい泣てゐるは涙ぬかうふ所ふうかく居さらば、どんからはさい目様見やう者知ぬ、者おだやと、立よる是。ぶ。い。ら。ま。ま。刀。刀。鞘音緊霧在此ぐ。ま。あ刀まで忘てはらんまたいいなーといそふ、何

一轉開新境

由良真心寓在此刀阿北亦不孟浪視事兩箇靈心暗合冥投

本段主意逐次有令解如初不識宅兵衛其人

前出平吉至此見其不

がかゝいふ情根だや物欲討氣はあいハ色理と、
ゑ。ふ。ゑ。上。を。打。ち。緊處在此阿北ム光景如描出、、付はは刀とりくど
抜。抜。そ。い。一。生。懸。命。は。よ。心。ち。ゑ。を。ー。内。言。の。助。殺、
はは刀はこゐ口ぬ抜。う。ま。ち。仕。宅。ふ。抜。墨。を。ー。ふ。
ハ、ム心ゐてかハテふーぎなと。目を放さぬかはは鞘
口。ふ。案。の。ふ。口。ふ。さ。が。ふ。ゆ。い。い。ゑ。せ。は。思。ひ。ッ。ン。宅。
前。の。上。は。心。ゑ。明。ゑ。ゑ。方繞察起恐んで抜ふ立ゆせ、ふ。
判官抜はは宣為義抜の首はとふ上はは の難題はつ
ト、なゑらぬふ諧の愽不。為義抜の年恰好ふ似ゑふ

孟浪下筆後闕破假装宅兵衛亦其伏脈、

靈心慧眼明々了解、從前雲霧盡消散、

涙字一點本段情況盡、此後數箇涙随境點綴、皆從是出

我子なれがかゝりに立寄所なれ。さながら夫を殺し

いかぞ。迄でさへかまへく迄まい逃る事。杉まに。夜半に逢

ハ。（照前）上使の刻限。抜差ならぬ刀にあたりくづれ

げしき。此子を切てお外がかゝりに立いといふ心

どあつた。か。ハア。をはと刀のをんど出とげて後。の

様となかる。（趣勢一頓然ム、後飇開下面）かく迄お主を太切にと云ふ由

良の助様歎討所存がなふて何とせふ、是。怪風情。

此。我々。なれど。疑ひ。る。は。尤。そふ。ぢや。（忽又闕破那心内）此平

右をおれがはりに殺をれらば夫が死ひも叶と

見義勇往、方纔了二一事一、忽又私愛牽攣處逆境、到底不得使人心冷然

何等苦境、何等愁情、

いふ拙ぞふぶやと刀取上て、義膽ふまばぐん心
ぜきないおれ雅（おさま）遊びに余念（よねん）なき趣にて何と殺
さ。れうた、至情業じた疱瘡（ほうそう）もおくふ拙ないかふ丈れ為
おやとて。秋のかれがか殺をとふ。梅もいかがふ
因果（いんぐわ）ぞかゝ悲び流すりふまけるが。漸（やう／＼）ふ流とおさん
コリヤ平吉、宮へおぢやくいふなどと何氣のう。アヽ悦
やとかい探れ窓もあるに。願が叶ひあてきた。コレ何でみ
ふとの、かくしがそは探ふ成て居のするとの、梅も幺
かしたういかゆと、とゝ孫が甕（かめ）まつちやる程ふて

稱児無智無心語々尤易感動

しが敷き寝ふ敷き布団、アイそんあらとら様が
出かしたと誉てうやう、誉ておやくサカ様が様が
そる様ふこかう西の方へ向ふさうあれ我
合して、目をふさいでれなむあこぶ仏くがを様
のかあとく様の為おや様ふれ どふぞ仏様新上
おそといふよの。悲痛 夫レ〳〵をかさい 諸構為不へ行
様ふよふお念佛申ちやう、ヤおまや一人行るハ
いやおやかく様と一ふよいこ、寂悲痛 何のうれ一
人やうふぞいやいとく様を追付行カちやるかも

又ゑ行ら行ふいのふ。伊ふ。ひふ。ふ。ふ。ふ。一點語見其激痛之情阿北五内俱裂又何怪

ゆ。程。掏。ぶ。ち。ま。ゆ。る。く。と。ち。や。く

ま上。く。波。の。限。り。嗚。瑳。の。數。ふ。名。を。お。ま。ぜ。ト照前母

ハ。ち。つ。と。心。付。あ。む。こ。宝。ま。九。り。舟。や。色。ん。と。掏。搦。

お。ろ。、。我。ま。ま。後。ふ。立。四。り。。な。む。あ。み。ぶ。仏。と。あ。か

上。ま。光。い。橋。書。内。ま。ち。助。。ま。ふ。波。ま。て。ま。い。色。ま。い。返

ま。湯。ま。く。。照前ま。ん。な。れ。ま。ま。つ。ち。く。波。ま。ま。ふ。振。ま

か。い。ま。ま。ゆ。へ。で。。結前「開後」ま。く。怪。ま。ぶ。か。ら。今。更。ま。い。ま

が。と。ま。ま。る。。一。間。を。ひ。ら。き。、。ア。く。九。ッ。の。種。い。ふ。。照前

平吉性命争些兒送了、乃劈面起奇峰引入勝境一篇奇觀全景總收在這齣

惡漢依然驕傲、

由良依然恭愼從容

百兩包亦復陳套手段、眞可厭矣、因起宅兵衛激怒居止、隨而入闕破、打拾宅兵衛、而後兩箇眞心忽然發露、前段情事收合成一團、始有今曉

為義が首受取らふ。よく渡せと大音上。まくら首上使
へ手渡しせんと。威儀いと改め由良の助が首級
おかバ。むかと。驚くけ。母。制でおかぶ扣ゆまで
だ。何ぞ首討ぶおぞ。又贋首なくたらが。ハわおや
がいよ。詬罵猶未已いで實撿と立寄て。器の蓋を引ぬく
またぞ。首よん。あらで。百両包。伏後つる宅兵衛見
ひくこまや家来の格で又賄賂でたゆのかいイヤも
ふ代まだやいすぬ百両の目くさり金やしかえ
はそと取て捩捻判官の種を殺さぬ。くらは問進

疾風迅雷忽然起自手中絶快武技絶快華情讀者到此不識做甚麼理會忽接一呼點破他名字文字翻閃欲使人目驚

きゐい主人く歎ふ汝ぞ性根いで出通ゐ打ま て注意とうきゐ出ゐ完ゐ御ゐ り ゐ ぃ ぃ ぃ と 打 き ゐ 手練の手裏翻眉宮にゐ ぃ と 流 ゐ く 血 汐 流 ぎ ゐ 引抜打うくゐ そ 小 拳 を 片 手 ふ ゐ つ と 受 ゐ ゐ 寄 岡平右衛門天晴忠臣心底見えた 磨頭一呼可驚可怪 何が何と。平右ホ、由良一詰解説 此山科より引籠り長久と斗ぶ柔歎 詩や詠ざるや 徐の性根我紀ん為現世我ゐ 命を投出し先ゐ心孔徐ゐ彩を載く赤ぃぶ及ば ばゐ忠臣義士。ホ、出かゐれを粉ぎ、此上何

隻眼偵視快見平右這番裝作勿姓袖中盟狀咄嗟辨了

一點夫妻相呼乃知了
從前情事裝作兩箇人
作兩番手段干由良

か憚からぬ徒黨の人數〳〵一味連判。是ゝ〳〵と懷中が手ずから出せ連判狀。小栢の血汐を志つかと。そり付。足拵ち。平右衛門一味同心の血お。滴だぞ。ハテ、、、有がゝしく。平右感拜女房悦べく歎讨ぬ。供が叶つゝ。嬉しうござんすよくいちれ人と、多の蔭見れ。潛不穿衣裳もそろ〳〵今ぞ。ち。こなお未つ必遥下つくかつ。ちくだ、由ゝれ助力弥を呼平右を誘りせ、亡君ゝ存生の砌ハ、國蓮舍と隔ゝれぞつ度ゝ。面をば。ゝ元ゝ。

這番巨眼明炯々

禄為輕義為重、由良所以不得不推、

平右解説情事始今明、

らもてき忠臣哉。足極風情ふ故、置しい呼應眼まるて
眼有ぐ体系誤り、吉主君は丈を哉を立て吉引合せ下
されしが、今ふの系舎祝芸虎陽是虎、いうで以上
有べきぞ、禄を力はで集とて九牛ぐ一毛なれ虎。
顧前反呼忠系い抜群孫しを元由良の助上座い憚い
ざ光光と撫る武士の河ふ平右衛門拜泣牧も志
らもふ光を塚埋コハる疑き吉河作ら毫ま兵通法
隔光れぐお目見へ来ぬ拙者め、弟ふ殿様吉
切腹のお方らは北国へ系り、色まて掃る承り

悲涼不減麥秀歌

一路叙事幾折語意明整如列眉

嘆き、玉指釵を日ふにぎかけ戻つれぞおぼ
ゑ給ふ事中もちりぐでらく、是いとなんとるる
だと門ぢで擲も係きどつかをぬ。直ぶん
猛ふはさでふとる変ふたきど（ハヤ一く轉）ふ國ふ
ハはふ老内言れ助係もふるの妙きぶ。宜しい時れ
後もるそふふ物ぶと、吏と乗しみふ衝宮を陽り
ま一きれぐ言ぶ（再轉）是拉應呼風情れ抜ふめ色ぞと
男ふ功でもふくで中く時祢義にもかく ら きま
いどふぞふい仕振いとなるり扨から師也ぶ所啓

所仰柱石有這箇蹊蹺、有心腸者能不慨以慷、哉然在怒家則聞已熟、必然其心懈惰、此所以陷由良術中

三轉 新ふ建る屋敷の絵様、此業内伐ちる時らば、皮ぐ切る成そふる物だと、仕てふ面倒を求渋ぬ、なそふを出すも多れど、新条右故心を敵さず、あんかんと勤る中ふ、ふ様の舌無此上、四轉 回紀を求義を建中く敵対ぬ者ハなし、剣敵師直、出入を顧りるとの風呂、誠うそか心ふ、ふ業一誠ならば師直合先ふ対て仕回ふがよき進善と存し、及ぶぞふ、ぐらこなる様の舌ふ者を探うん為、亜相屋敷此係を拵、書と俱に上京致し、今日

此一著激勵平右真奇士哉

平右足輕的口角寫出精采居止宛在目能不喝采者

波瀾蹙起以問答成文暗倣左氏楚王上乘車望晉軍一段筆法全篇精神在此

の代をぐら、昨日一人投出したる斗ふ。大切ふ所人數ふ加へらるゝ。さいひ。由良助の内意義此所詞。ふ石爲石此紀行頃載仕ふよ。此平右衛門か身ふ寄り冥加なしやふ雖いやら。あつぱい涙。ぶ。涙字呼應胸。先ふ此つぶり面。何をお礼がゞざりすせぬとまくまを上まぞ。一頓如斯お小問是迄此お仕お目ふ〻殺さぬ我丈。平右衛門と言知りて。答一尤のふ審師直。ふ此上。彼と偽り主君の切腹。生産の模様次第逐一聞。爲ふ語る上。使の目此

莫見乎隱莫顯乎微有諸内必見諸外精鑒懸百錬鏡物不可遁

答問中一挿叙事句法

うるこゝ面ふ憤怒を孤りせしは、コレ欲よあら美味方れ何某面体きゝぬ忠臣と感ぞは内コレ試平吉と上役の者照前信しても信ざれぬ平伝れ生家物ハ寺圖平吉悪門と、コレ素ず目の付所ず面ち眼刀、又平吉赤門と呼なれ上ゑくれ金子紙のハ是しは一問ヲ、夫ハそ一味の案へめいくきりそ皮度のへ用、則亡灵割符れ用金、一答然らば首の品物ふへらきをは一色ゑも割符れ内成や、一問句變ヲ、ゑ金多ふ義ちん一答句變尋出しそ見らきよと泡ふそ

變換文家點綴取恣態處、

由良心算徹頭徹尾周密不遺、

雫即涙也與先後數箇涙字亦復呼應、

つと夫婦きて尋ぬるそ一色愛にと女房が姿出そ夫が取ゝく折ゝ一ムヽ傾名る器ゝ右衛門仏果の為と書ゝ乃更以平右一問ヲヽ一味の人数四十余人首尾よゝ総計課せそ一人も漏らそ皆退後生元迚も其通ゝ訳の問弔ゝ古加偈へぬ拵ふゝ内証内緒きつゝとゝ受納ると勇氣ゆまぬ目の内ゝも忍毛の別きとゝ涙ゝ堪ゝこゝが一ト章夫婦目と目線ゝ合ゝて涙ゝ流ゝ出ゝ厚恩ゝ忘ゝ涙身ゝ家ゝそつと大地ゝ伏

換接何等句法

前段一局章法斬新句法奇變以成此文收結極是天下異觀全面為靈動下段平叙結以猶雨止風歛江面只見澹澹平波

只依おぼむ斗之。頻に、暫時は慈ふ勇氣弦之ゞく我誤り此山科ふるてはかうはまづくひ心を往せで見る直ち種倉へ歩足し筆ゝ紙あれ化ぞ殺さん、ゞく刀弥諸士のめんく用意まくで出迎殺さんとつと嵜て立出るは、大工左衛と略せしめいく、應首段一多時深之助磯合十郎竹森喜多八原田右衛門刀弥も俱ふ旅出立素裏足ふる氣もでゞくゝ、若い様お勢かい。申がきせるやたぞいゝをごぼ見まそるお爺物がございまそ此ら。一ゝ

如見平右其人

瑣細関事寫来周摯平右居止如画

協心結義事體不得與前日足輕的同視平右品階至此始完了

に殺して拙者めが引かけいで気がすまぬわいで
げりませぬ。お情掛に出来た。アヽどうやらもくがい
なりし、ドレドレいくらも茶番おもてよからせう。然では足と
かふ物かまくら殿が孫が合羽に塔がと。ちりおもろ
ひ給ひし人を振舞の退陣は家も又いかにし、
由良の助も寺岡平右衛門只今が百石の
御加増又一天下ヲ役人も改めば近習まいづまでも同列同
格ぞや、百石が知行がいれ侍には引上にあづかる
がヲ、謹慎らず発足有。なりと斗に寺岡が天へも

尚追涙字結

一轉壯勵激動

上が心地がして。いさゝか立ち出の門出の悦び。一面歡喜妻は名殘と惜めど。一面愁苦今更目かゝ涙の種の平吉が多代子倶に立ぶ。やさしげ心の弦をかなで。法士の心も一段ふ涙。と流を由良助の腕の聲うく。あれ見よ。あれ見よ。夜太白星晨おふ影り。北斗星の光とうぐふ時い味方に利をと孫呉ぶ。不必答今の天さい氣ま嘗ら。時の吉左右幸先よ。いさんぐ門出と大星が智略い実も合祝。山川萬里ふひろまりしいろはの文字い四十七。字字既と今の

三殘字疊得好、

代ふ所なれば殘ぬと名を殘す。おぼろをかこつて

三至 ゆく雲は

忠臣講釋第八回終